No. 1129

被爆朝鮮人徴用工

海峡を遠くへだてて

三菱重工広島造船所で被爆した盧聖玉ら241名の朝鮮人徴用工とその家族5人が昭和20年9月15日、福岡県戸畑港を出港、壱岐附近で枕崎台風に出会い祖国を目前にして海峡に散った。
この事実が判明したのは彼等が広島駅をたったまま行方不明となってから29年もの歳月を経てからであった。
昭和50年8月20日、30年ぶりに一人の韓国人被爆者が広島を訪れた。盧長寿さん（61才）。駅には弟の盧聖玉と同じ三菱重工で被爆した深川宗俊さん（54才）が出迎えた。戦後30年それぞれが背負い続けてきた「ヒロシマ」にひとつの区切りをつける来日であり再会であった。盧さんはかって住んでいた広島市草津町を訪れた。援護の手が差しのべられることなく忘れられた韓国人被爆者の現状を考え、この機会に被爆者健康手帳の申請を決意し証人を求めての草津ゆきであった。
街並みはまだ昔の面影を残していた。被爆当時、良く顔を会わせた網岡さん（当時19才）の家をさがしたずねた。
一音一　お元気そうで何よりです。いや年をとりました。私は貴方が港から帰られるのを見送ったのを覚えています。奥さんは。亡くなりました。母や弟の盧聖玉らが全部死んだでしょう。男の私は酒を呑めばいいけど女はね。二人で良く泣いたもんです。被爆は。観音です。草津には。6日の夜戻りました。そのあとここで良く顔を会わせていたわけですからね。それを証明すればいいわけですからね。
次第によみがえる30年前。徴用令書一枚で強制連行された若い徴用工を産業戦士として育てるため、県の命令で三菱重工社外指導員であった盧長寿さん。彼等が強制連行さえなければ、いや日韓併合さえなければ……。この思いは、日本人として徴用工指導員であった深川さんにとっても、戦後30年胸からはなれなかった。私も表爆者だが彼等と違う。私は加害者であった。この違いをはっきりさせなければならない。私が日本人ならば。そして一人で2年にもわたる調査を行い盧聖玉らの死までの足どりをつかんだ。
（三菱重工広島造船所での交渉）
一音一　（盧長寿）帰らぬ主人を現在まで白がみになってまで涙を流しながら待ちつづける遺族をみた場合人間として口では表現できません。少なくとも三菱は彼らが帰らないという現地からの手紙をうけとっていながら一片の通知もなく今まで放置しておいたことには、責任はまぬがれない。心外に耐えません
一音一　（三菱重工総務部長）気の毒に思いますが、基本的にはあなたのいわれる権利や責任は日韓会談ですでに話がついています。一企業の問題ではないと思います。意味がないんじゃないでしょうか。
今なお、むくわれることなく時は過ぎている。ここに散った241名の徴用工と盧さんの肉親5人の御霊はただの戦争の犠牲者として済まされるのか。壱岐芦辺町。この海岸線と入江に遺体は流れついた。当時、町役場に入って間もなかった吉富さんの案内で遺体を埋めた竜神崎に足を踏み入れた。ここ十数年誰れも足を踏み入れていないという。
一音一　（吉富さん）大きな台風がきて翌日たいそうの死体が流れついた。村の人が総出で、車力（大八車）に死体をのせ、この竜神崎に運んだ。運べるところまできてからあとは肩にかついで運んだ。ざんごう堀りだったと思う。
長い長い道のりであった。盧さんのすべての肉親が、同胞の徴用工が眠る墓標なき墓地。この海峡の向こうは夢にまで見た祖国なのだ。あまりにも遠い海峡。
一音一　（盧長寿）ああお母さん弟妹よ三菱広島の応徴士よ、今30年ぶりに盧長寿が来ました。ああ運命のいたずらか夢にまでみた祖国を目前にしながら海峡に散るとは誰れが想像したでしょう。30年過ぎた今も故郷では親や妻子らは今日帰るか明日帰るかと村の辻に出ては待ちこがれているのに。ああ水魂になっていようとは。残念です。残念のあまり、ことばを失うほどです。世の神々よ、海神よ霊魂をどうか安らかに眠るべくお守り下さい。
海峡の向こうで苦しみを訴えることもできず、あらゆる救済の道を断たれている朝鮮人徴用工や被爆者。
今や風化しようとしている戦争の過去、しかし韓国人被爆者盧長寿さんは、これからも、終わりなき戦後を背負い続けて生きねばならないのだろうか。